青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内

印刷所　オリオン印刷㈱
0252-83-2151

ごあいさつ

青山同窓会会長　鍵冨清一郎

梅雨空けが近づくと、総会の季節です。多くの皆さんに又会えると喜んでいます。

一年振りのつもる話しで楽しくやりましょう。毎度のことですが、準備をされる幹事の皆さんごくろうさんでした。

息子や娘、孫達も誘って、段々と同窓会の輪が、大きく広がることを願っています。

東京青山同窓会 新/人/歓/迎/会/

幹事長　45回　田中一郎

一昨年から始めた東京青山同窓会の「新人歓迎会」は今年で三回目となり、ようやく軌道に乗った。

昨年どおり、学年幹事が中心となって、新人（93回生）を歓迎するという形式で、5月21日夜、東京四谷の主婦会館で開催した。

南学会長40回、田中幹事長の歓迎のあいさつに続いて、母校を代表して上京された目黒俊雄先生のごあいさつ、それに答えて、新人を代表して内山陽介君のあいさつがあった。引き続き身近な先輩を代表して今年東京大学を卒業して社会人となった茅原祐一さん86回（旭通信社）の「東京生活講座」と題するレクチャーがあった。

懇親会に移り、昨年に引き続き出席された最長老佐藤岩男さん33回の音頭で乾杯、33回から93回まで60年にわたる老若の先輩・後輩入り混じっての歓談で和気アイアイ。

新中校歌を先輩が合唱すれば、新高校歌を後輩が合唱。また、応援歌を先輩・後輩で競演し、大いに盛り上がった。

最後に金山副幹事長60回、のあいさつで閉会。先輩35名新人62名計98名の盛会だった。

在校生大活躍！

ここ数年来、後輩達在校生諸君の、文武両道にわたる元気な姿は、大いに喜ばしいことであります。今春以来の各種大会の戦績をここにおつたえします。

剣道　県総体　男子団体2位　男子個人3位渡辺健司(3)　**北信越総体**　男子個人3位渡辺健司

水泳　県総体　100mバタフライ3位五十嵐涼子(1)　200mバタフライ2位五十嵐涼子

ボート　県総体　男子ナックルフォア2位、男子シェルフォア1位　男子シングルスカル3位松田一章(3)　**北信越総体**　男子ナックルフォア6位

ラグビー　県総体1位　**北信越総体**3位

レスリング　県総体56K3位室賀亮(1)

柔道　県総体　個人ベスト8細貝邦行(3)

陸上　県総体　男子800m5位猪股弘明(2)同6位木村秀之(2)　五千米競歩1位佐藤元(2)　男子400mR2位、男子千六百米R6位、男子走巾跳1位小林義治(3)　男子総合3位　女子走高跳3位横沢美貴、**北信越総体**　男子五千米競歩3位佐藤元(2)、男子400mR2位（**インターハイ出場**）男子千六百米R3位（**インターハイ出場**）男子走巾跳1位小林義治（**インターハイ出場**）男子総合2位、女子走高跳1位横沢美貴（**インターハイ出場**）

フェンシング（インターハイ出場）

男子、佐藤孝幸(3)、原良彦(3)大島規夫(3)、中山正成(3)、宗田聡(2)　**女子**　高原隆子(3)、本間修子(3)、松井みどり(3)、早福恵子(2)、小野由起子(2)

軟式庭球　県総体　男子団体3位　**北信越大会**　男子団体一回戦敗退　個人、加藤・後藤組、2回戦敗退

囲碁部　県大会　男子個人4位丸山浩樹　女子団体1位　**全国大会出場**　女子個人2位高沢純子、3位斉藤博子

ラグビー部 覇権奪回！

59回　関根彰圓

紫紺の優勝旗は浜藤主将の手に、しっかりと握られた。6月8日新潟工を堂々と降して4年ぶりの優勝であった。

56年度優勝した後、どうした事か部員が減少し、57年の秋には17名にまで落ち込み、当然戦績も賑わず前途多難を思わせた。せめてもの慰めは各年次とも部員の進学が順調であった事である。しかし58年入学の現三年生が28名入部して甦った。折しもこの年山中監督を迎えた事は実に幸いであった。以来歩一歩と力を伸ばし、今や70名余の大所帯となった。

この栄冠に到達することができた。北信越大会は惜しくも三位に終ったが十分な手ごたえを持ち帰った。今や8月下旬の団体予選・10月の鳥取国体・更に正月の花園全国大会出場の夢に向って三年生も意欲を燃やして猛練習に取りくんでいる。正月は大学受験と交叉する。従って学習時間の十分とれる特別メニューを組んでいる。38年度折戸主将のもと岡山団体に出場して以来久しく全国の檜舞台は遠のいていた。今年こそはの夢を実現したいものである。

同窓会あれこれ

事務局　岩田はす枝

「同窓会とはノスタルジアである」かつての名校長礒幸次郎先生が幾年か前の東京青山同窓会総会でのべられたお言葉です。忙しい世の中から解放されてふと落ちつきをとり戻した時、懐しく思い起す青春の日、たまらない郷愁をよぶ、これが同窓会なのでしょうか。

「青春とは愛である」今は亡き阿部藤策先生のお言葉です。そこにはロマンがあり、愛がある。限りなきものを求めて生き続ける青春、去りし日を懐しんで皆さんが集って来てくれる同窓会、こころのふるさと、この同窓会に勤めて三十余年の年月が過ぎました。私ごとになりますが、昭和二十六年、主人の病気で少しの間と思って勤めさせていただきましたのが、幸せのままに身を退くことを忘れて遂に今日に至りました。その間主人の健康も回復したのですが、十年前に私をおいて逝ってしまいました。現在は娘夫婦と孫二人、ごく平凡に暮しております。

礒　元校長

青山倶楽部

「青山倶楽部」秋草道人会津八一先生揮毫による看板のかかった同窓会の倶楽部が古町六番町万松堂の二階にありました。古色蒼然とした中に明治の気品が漂っているような倶楽部でした。戦後間もない頃で市内に集会場などもあまりなく、同窓の皆さんがここに集って来て語り合い、時には盃をかたむけては論じ合って居りました。この倶楽部は昭和二十四年に当時の同窓会長長谷川寛先生(12回)のご援助で、本田喜作さん(19回)原隆太郎さん(26回)達のご尽力によって開設されたとききました。私の入った時には、美人で豊かな教養をおもちの志賀さんが居られました(志賀先生ご母堂)。毎日お出でになる方はごく一部の限られた方でしたが、碁を打ったり、お茶を飲んだり、時にはアルコールが入ったりして、のんびりとしたひとときを過して帰っていかれました。本田さんの友達には地方の豪農の方が多く、新潟へ出て来ては寄っていかれました。古きよき時代に生活された方々のみ、故人の面影をしのぶ時、その方々の生きた時代がほうふつされます。」集会としては、医師会、ユネスコ協会、女性文化会、一日会(市内財界若手有志の会)等の例会、その他団体の会合、クラス会等に使用されておりました。長谷川寛先生、本田喜作さん、斉藤希弐さん、懐しい方々も数々の思い出を残してみんな故人となられました。当時毎日お出でになった中では小山さん(小甚さん)が健在でおられます。

母校全焼、復興期成会

昭和二十九年四月母校全焼、のんびりと思い出に浸っていた同窓会も緊急事態に敢然と立ち上りました。長谷川会長さんは直ちに学校、PTAに呼びかけて復興期成会を結成、関係官庁に陳情、募金に着手されました。小山さんは毎日倶楽部へお出でになっていた関係で、長谷川会長さんを助けて復興にご尽力、白勢誠一さん(39回)にお願いして本町八番町の白勢さんの会社の一部をお借りして復興期成会の看板をかかげました。当時の学校建築は全額県費ではなく、半額地元負担ということで、関係市町村、同窓会、PTAが負担しなければなりませんでした。復興期成会の役員は県、関係市町村への陳情、同窓会、PTA、会社関係の募金にと日夜奔走して復興に尽力されました。白勢さんのご好意で無料で事務所をお借りしておりましたのですが、三十一年学校の一期工事完成に伴い、仮校舎の一部へ期成会の事務所を移転いたしました。その頃長谷川会長さんの健康状態が思わしくなく、三十二年の総会で鍵富さんが会長に就任されました。ここで昭和三十五年の校舎完成竣工式まで同窓会は募金運動に専念いたしました。三十七年末体育館完成、三十八年七十周年記念式挙行、四十三年校庭に青陵健児の像建立、これは青陵高校の校名に端を発した青陵問題に決着をつけて建てられたものです。「ああ青陵に生気あり」かつての若人が朝な夕なに口ずさんだこの応援歌、同窓生と在校生が〝青陵の伝統よ永遠なれ〟と希いをこめて建てられたこの像に、青陵の息吹と伝統は永遠に生き続けることでしょう。

長谷川元会長

四十七年、八十周年記念事業として青山会館建設、会津八一歌碑建立、この間殆ど募金にあけくれた同窓会でした。青山会館の建設を最後に復興期成会も解散されました。五十七年、九十周年記念式挙行、第二体育館建設(県費)、皆様の寄附によって施設設備は完備され、寄附金の一部はクラブ振興基金として後輩のクラブ活動を援助することになりました。長年の募金に対するご協力、ほんとうに有難うございました。

同窓会

母校の中に同窓会事務局をおいて現在に至っております。永年の募金活動によって同窓会の基盤も出来た感があります。昔は出席者も百名程度だった総会も役員始め、会員のご協力で現在は千名近い出席者をもつ盛大な総会をみるようになりました。同窓会の一番苦しかった時代に真に同窓会を愛し、心血をそそがれた亡き幹事長、斉藤希弐さんも草葉の蔭で満足して居られることと思います。

三十余年の間に出逢った数々の人々、みんなよい方ばかり、青山に育てられた人間のおおらかさ、心のゆたかさ、私のこよなく愛するもの、故人となられた方も数多く、私の生涯のよき思い出として大切にしたいと思います。長谷川会長さん、鍵富会長さん、温容にして円満な人格は青山同窓会の象徴であり、立派な人間性は脈々として後輩に引き継がれてゆくものと信じております。

現在は会員皆様の会費によって同窓会が運営されております。限りない同窓会の発展を期して益々のご協力をお願い申し上げます。

◆大学別合格者

	58年	59年	60年
●国立大			
北海道大	2	3	5
東北大	30	27	18
筑波大	10	6	10
東京大	9	11	14
東京外語大	6	8	2
東工大	9	7	5
お茶の水大	4	3	3
一橋大	4	3	3
新潟大	159	156	172
金沢大	7	3	3
京都大	7	8	6
小計	284	287	278
●私立大			
早稲田大	55	66	52
慶応大	25	34	28
中央大	34	29	30
明治大	24	47	32
立教大	18	12	14
法政大	22	27	13
上智大	8	16	9
日本大	21	26	29
青山学院大	15	22	21
東京理科大	40	33	30
専修大	9	19	14
東洋大	5	9	5
日本女子大	6	6	8
武蔵工大	8	5	6
明治学院大	14	9	6
同志社大	8	6	5
小計	444	502	436
短期大学	25	55	29
合計	775	872	759

青山三八会――「随想集」を出版

38回　笹川仁一郎

青山三八会（新中第三十八回昭和六年卒業生の集まり）は、このほど会誌「随想集」を出版した。A5判、180頁、会員九十余名の寄稿文が掲載されている。

その一編一編に新潟中学で共に学び、共に遊んだ仲間たちの、その当時の面影が映し出されていて、ひとしお懐かしさを覚える。

学校裏山の野焼き、いちじく盗み、関屋ダンゴ通りや慨嘆演説と、わんぱく盛りの中学時代の思い出をはじめ、級友の大半があの悲惨な戦争に狩り出され、いずれも筆舌に尽くし難い辛酸をなめて生還し、敗戦後の祖国再建に挺身した回顧録や、また戦死あるいは病死した級友への追悼文そして人生七十余年の生活記録に、私の健康、ボケ対策といった近況報告など、多彩な生々しい珠玉編ばかりである。

随想集の題字は田巻二郎君が揮ごうし、松の緑に囲まれた思い出深い母校の昔の姿を関屋俊彦が描き、これに桶谷勇策君のスケッチした印象的な風景をカットとして挿入した。

三八会は戦後の昭和23年第一回の懇親会を開いて以来、毎年2回会合を開き現在に至っているが、その詳細な記録は写真とともに「青山三八会記録」として残されており、これを併載した。

この随想集を出版することになったのは、昨年八月の例会で、我々も既に古希を迎えいよいよ老境に入ったので、この辺でみんなの消息や懐かしい思い出を語り合い、結びつきを一層深めようとの話し合いから実現の運びとなったもので、まことによい記念と思う。（笹川仁一郎　記）

三九会――三川♨へ！

39回　福山健

眼の前に管名岳（すかなだけ）が大きく迫る。

阿賀野川が豊かな水量を蒲原平野に注ぎこむその左岸の馬下駅南にあるこの三角の峰（九〇九米）は新潟からよく目立っている。それは阿賀の位置を示す目標でもあるが近くで見上げると頂上まで送電線に占められて折角の山容も気の毒だ。

午前十時半新潟駅前発のマイクロバスの中は次第に賑やかになってきた。さっき配合した「ワン・カップ」が利いてきたのだ。今日は五月十二日㈰我々三九会の年次例会で東蒲、三川温泉に一浴清遊と出かけてきた次第。一行は東京から参加の四名を加えて十四名。

昭和七年卒で七十才を越えているのだが皆な大した元気幸に、天気清朗、青葉と青田が目にしみる。やがて車は阿賀の右岸に渡り岩谷の平等寺へ。室町中期の建造、薬師堂は国指定の重文、カヤ葺き、桁行三間、梁間四間の簡素な木造のお堂、先年文部省により屋根はじめ破損、傷みを修復されすっきりとした端正な姿で杉木立を脊に我々を迎える。境内にある異形の大樹「将軍杉」と共に東蒲の栄えた中世を物語る。記念写真をパチパチ。急な坂道を曲りくねり三川駅を経て三川温泉は三越（さんえつ）ホテルへ。先づは入浴。ここで地元の佐藤平八君（津川町）を加えて計十五名。同君寄贈の銘酒「きりん」で乾杯。お互いの健康を祝し宿が心づくしの料理の数々に盃を重ねる。東京組は福島隆作、鈴木秀雄、森上輝雄、木村豊雄の四君、本当によく出かけてきてくれた。鈴木君は仇名は「でこ」住年のボート部の名コックス、大男の中で小粒の同君はよく目立ったが、小生とは附小からの旧友。建造物の基礎工事では腕に自信の専門屋で只今も現役。電話一本で東南アジアでも砂漠の国の工事現場でも乗りこんでゆく。口数が極めて少なく、遠い空の彼方を見渡しているような目は小学生の昔のままだ。健在を祈る。

歌う者あり、立って踊る者あり、座は盛り上がる。やがて皆川トラさんの音頭で新中旧校歌の合唱。

孫たちへのみやげに「三川まんじゅう」をぶら下げて、再びマイクロバスに乗り、老童一同新潟へと帰りゆく。（福山記）

〈当日出席者〉

福島隆作、森上輝雄、鈴木秀夫、皆川竹次郎、皆川登良夫、阿部尚道、佐藤裕雄、山下八郎、岡崎清彦、内藤虎夫、金内一雄、石原信司、吉田二郎、佐藤平八、福山健

同期生主催――三林輝夫（65回卒）フランス歌曲の夕べ

65回　宮尾益治

65回卒業の三林輝夫君（東京芸大卒、現在東京芸大講師、お茶の水女子大講師、二期会理事、鎌倉市在住）は、テノール歌手として、各種オペラ出演や演奏会活動など東京を中心に国内はもとより国際的にも広く活躍している。54年にはアメリカ・プリンストン芸術歌曲フェスティバルで大好評を博しているし、特にフランス歌曲の分野では、現在日本の最高水準の歌い手として高く評価されている。

このような優れた声楽家を輩出したことは我々65回同期生として、大いに誇りとするところである。しかしながら、中央での活躍に比して、郷里新潟県内では、今まで、音楽発表の場が少く、同君の優れた音楽を聴く機会が余りなかったことは誠に残念なことであると言える。こうしたことから、三林君の声楽を広く市民に聴いてもらい、また今後の活躍を祈り、激励するために、リサイタルを65回同期生が主催し行うことになった。

青山同窓会の後援もいただき別記の要領で開催の予定。同窓の皆様の多数のご来場を切にお願いしたい。

「三林輝夫フランス歌曲の夕べ」
昭和60年9月25日㈬
午後6時30分開演
新潟市音楽文化会館
前売券　一八〇〇円　当日二〇〇〇円　全席自由
主催　青山65会
後援　青山同窓会　新潟市音楽芸能協会　新潟放送ほか

前売券は市内プレイガイドか65回生にてお求め下さい。
問い合せ先　電話66－695
2　宮尾

写真は最近の三林輝夫君

追悼

木村晋先生を偲ぶ

55回　早福　卓

昭和19年10月も終りの冷い秋雨の降る日、私共3年生約40人は「健民修練」と云う事で電鉄七穂駅から寝具を牛車とリヤカーに乗せて木村先生のお宅に向かったのです。

初めの予定は先生の実家である高念寺が合宿所と云う事でありましたが、お寺の急な用事の為代ったのです。到着して驚きました。大邸宅なのです。全日程50日間のうち、始めの30日間を先生のお宅で生活させて戴きました。

朝は6時に起されて中ノ口川の堤防を味方駅か七穂駅かのどちらかの駅までの駆足ではじまります。ミゾレの日も雪の朝も上半身裸で走らせられました。先頭は丸幹助教ですのでサボる事は出来ませんでした。

敗戦の前年でもありましたので食糧は無論配給制でしたので「米飯通帖」持参の寄宿生でしたが、流石名望家である木村先生のカオで、近隣の部落の方々からのご協力を頂き雑穀や芋野菜が毎日届られるし、どう云う伝手(ツテ)か新潟市の食肉協同組合？からは牛のアバラ骨も届くと云う具合で当時としては望外の食事をさせて頂きました。月曜から土曜までは、教科別にそれぞれ担任の先生が電鉄通勤をして寺小屋式の授業をして呉れました。帰途にはリュック姿で帰られる先生もいました。木村先生は、私共3年生の担任でありませんので毎週学校へ通っておりましたが、帰宅されると羽織姿に着替えて夕食は大抵私共と一緒でした。

夜の自習時間に時折り自分が歩いた人生の経験を踏まえた訓話や同郷の偉人平沢　興先生の逸話などを聴かせてくれたものです。

私共が飽食？をしている同じ時期に同級生の一部は岩船郡で亜炭掘りのタコ部屋生活をしていたり、上級生の大半は名古屋の飛行機工場で箸の立たない雑炊で働かされ、おまけに地震でケガをした人までいたのですから正に天国と地獄の違いでした。これもみんな木村先生の余慶に与ったものであります。

味方村の村長を辞められてから先生は、私の「励す会」にわざわざご出席して下さいました。

50日間起居を共にした「えにし」とその後の師弟関係からでしょうが、今更乍ら先生の人柄が偲ばれてなりません。

御礼に伺った時、元気でピアノを弾いていた先生の笑顔が瞼に残っています。合掌。

「えちうど」の頃

60回　坂井丈夫

昭和二四年、高校一年の春だった。

或る日、同級の堀浩一と笠原誠がやや深刻そうな顔をして連立ってやってきて言った。

「三年生が文学部を作ると言ってきた。一諸に入ろう。この間師範の講堂で鶴見祐輔の講演を聴いたが、文士になろうとする者は他流試合をしなければならないそうだ。」

かくて、私は文学部（文芸部という俗な呼び方を私たちは嫌った）の部員になった。

西控所北側の部室へ行くと、三年生たちが顧問の伊狩先生を囲んで文学談議中「…観察眼だネ。例えば道を歩いていて向うから来る人の容姿、性格、態度をどう描写するか…」小耳に挟んだ師の言葉は心に遺り、齢知命に到った今でも巷で窈窕に行き逢うや、直ちに眼光布裏に徹する形で実践中だ。

機関誌名は、ETUDEから採り近隣の高校の文学仲間からは程度が高い、と評価された。服部正平さんは森欧外論、陸軍中央幼年学校から編入学した関口英男さんは甘い初恋物語、片桐欣哉さんは女口調での身辺小説、長浜利夫さんは妹への挽歌を載せている。

この他に機関紙として「青陵文化時報」を出していた。ガリ版刷りのものであった。

一期上の部員では、宮島敏男さんが、無い筈の軍隊体験を上手に記録文学にした。小柳佳一郎さんはカミユの「ペスト」を評論した。神田梯三さん、高村たけ志さん、小柳忠明さんも活躍した。

誌紙の発行後は合評会を行った。上下の隔てなく自我の主張が交錯し、よく喧嘩別れになった。部員同志は必ずしも仲良しではなく、貶し合いと「あいつに負けるか」がお互いを支えた。

同期の連中の作品では、大田弘安のグランギニヨール趣味、姚正男、堀の太宰風の小品が記憶にのこる。石原佑浩は妊婦で描いた社会派小説、曽我陽三は復員兵がデチ棒の大小を論ずる噺を書き、性悪な雷魚に嚙まれた。

笠原、佐藤春夫は器用であったが天明調、丸山敏視は常識的であった。伊藤貞夫の亡き母を偲ぶ詩は良かった。平山耿児は和歌を作った。下級生では北山道子の詩才が光る。乳房で書いた馴れた詩で、われわれは愚劣な詮索をしたものだ。藤田みすず、橋本敦子の詩は可愛らしかった。詩人が多く江村隆三、太田一郎、大沢澄男等も詩を作った。

三年の開校記念日には文士劇。小山内薫「捨児」。演出は私。稽古は順調に了えた。しかし本番では、曽我と喧嘩した堀が蒸発、代役の私は科白を忘れ、佑浩敦子夫婦が寝る段になったら壁が倒れかかりギャアギャア。

想い出は尽きぬ。しかしあの早熟な鬼才の群れは何処へ行ったのか。齢十八で心朽ちたか。

さて、当時芥川賞でも獲ろうと考えていた私だが、先年遂に一著を世に問うた。その書名は「公害防止管理者読本」。

母校の図書館に納めたことは誇るが、幾多の文学賞とはいささかの関わりもなかったことは無念である。

遠藤先生を囲む会

67回　石田瑞穂

昭和34年に卒業する時のG組の担任であった遠藤先生がこの春勇退されて、市内の私立高校で第二の人生をスタートしたとのハガキを戴いた。

そこで、市内在住の級友に電話で招集をかけて、久々に、遠藤先生を囲む会を行った。

集まった面々は写真の十九名。順次一言ずつスピーチをした。授業で、源氏物語を朗読して下さった事。島崎藤村の千曲川旅情の歌を暗記させられたお蔭で今でも歌えること。絶対に駄目だと思っていたのにうまくおだてられて現在は医学の道に進んでいるのも先生のお蔭であるとか、又内申書をあけてみたら、自分でも信じられないくらいよい人物評が書いてあったので、大学に入れたのは学力ではなくて、あの内申書のせいと今でも信じているなど、皆の思い出は様々である。教職にある級友はあの頃の先生のように20数年経っても生徒の心に残っている授業を自分もまねてみたいと話していた。

先生からは、自分が病中、教え子の大先生方に大変親切にしてもらい感謝であった事などのお話しをいただいた。先生を囲んで和やかな一夜であり、又、時々集まろうと散会した。

人物紹介――その2（49期生）

医学・官界 教育畑などの巻

49回 駒林行弘

医者にも同期生は大勢いる。現在活躍している医者だけでも23人はいる。

なかでも、伝統をうけ継ぎ評判のよい竹山病院の院長**竹山行雄**、開院するのに大変苦労し、やっと安定した、こばり病院院長**土谷幸治**、信楽園病院院長**青池卓**、桑名病院副院長**田沢和内**も頑張っている。

親切をモットーに営所通りで開業している**阿部清雄**、内科では、団九郎に**稲泉武男**、古町で**細野耕爾**、上大川前で**坪井清禱**、大野で**伊田二郎**などが開業している。

精神科は多彩な顔ぶれだ。佐渡病院院長**堀内憲政**、松浜病院院長**和気和夫**、南浜病院の**中村五郎**、柏崎の**関富治**などだ。

歯医者では、市歯科医師会長をしている**池主淳**、川岸町で開業している**清水直彦**、東堀の**石田重雄**、いずれも評判がよい。

役人だった者もみな定年を迎え、いま第二の人生を送っている人が多い。

仁保武人は東亜建設、**志智勇**は本間組、**藤田甚一**は日産建設、**本田正胤**は福田組でそれぞれ活躍している。**見定民雄**は九州で岸本組社長になっている。役人から大学教授になったのが成城大学の**工藤弘安**、東京理科大の**丸山弘志**だ。

教授の道を真直ぐ進んだのが、富山医科薬科大学の**庭山清八郎**、千葉工大の**籏杏洲**、日大生産工学部の**斉藤勝巳**、専修大学の**坂井秀夫**、いずれも成績は抜群だった連中だ。

仏教界では日蓮宗本山本覚寺の**渋谷直城**がその道では重鎮、本成寺、**光山陽**も同期。

学校の先生も数が多い。**尾崎富衛**は中央高校で植物を教えながら自然保護を訴えつづけている。**柳生茂**などは惜しまれながら退職した先生だ。新潟日報で健筆を振った論説委員長、**長沼甲子男**も忘れられない同期だ。

どんどん紹介したいが紙面がつきた。次の機会にゆずることにする。

このようにわが49期会がよくまとまっているのは、前の幹事、故**小林寛直**白山神社宮司のおかげと思っている。このよい伝統は仲間がしっかり受け継いでゆきたいと思う。

編集部よりおわび

駒林さんにご依頼してお書きいただいた本稿が、紙面編集の都合にて、本号と前号の二回にわたる掲載となり、筆者、ならびに読者にごめいわくをおかけ致しました。深くおわび申し上げます。

ハイティーン水泳 新中・新高⑦

60回 平田大六（関川村）

13 賞状

中学生の分際で、高校水泳大会に出場させてもらい優勝した私の初陣は、今とちがって華々しいものではなかったし、私自身も冷めた気持で、「勝利」を受けとめていた。

はじめてもらった賞状は、やや厚手のB5のザラ紙に明朝の活字で縦に印刷されたものだった。新聞だって全部で2頁位の時代だからこれはやむをえない。しかし、種目や勝利者の名前は渡辺秀英先生の直筆だったと思う。

母はその賞状を、早逝した父と兄の肖像写真額の下の壁に、画鋲で張ってくれた。母にしてみれば、「新中」へ入った末男が公の場で初めて評価されたことについて、亡夫たちへの報告の儀式でもあったのにちがいない。

私は、おまえの兄（平田公平47回）は一組だったが、といつも母からきかされていたので、「頭」ではなくて、「体」のほうで稼いだ賞状に、そのことでいくらかひけめを感じたものであった。

今は、その賞状を壁からはずしてしまってあるが、紙の四隅に丸い画鋲の頭の跡が白く残っていて、老母の当時のせつない心情を察することができる。

14 本格的な特訓

さて私はこの日以後、水泳部の長距離のレギュラーの一人として大黒善弥50回監督の特訓をうけることになるが、これには事情があったようだ。

当時シーズン中は、水野清之助44回、藤宮松太郎45回、田辺尚雄50回、川瀬熙51回、柴田利一郎52回、吉田孝52回大島久54回などの諸先輩の方々がひんぱんにプールにこられ、自由に指導されたものである。私も、藤宮さんや吉田さんとコースを並べたこともあるし、水野さん、柴田さんにフォーム（形）を教えていただいたこともある。松波町の大島さんの御自宅に一夏泊めていただいてプールへ通ったこともある。

このような状況の中で、「平田をコーチするのは一人にせよ」という命令がおりた。

その命令の震源地は早川一二30回大先輩であったらしい。

早川さんは時たまプールへ見えられ、禿頭に和服姿で、誰もいない側のプールサイドに腰を下ろしだまって見ておられるものであった。早川さんが、現役とはもちろん、諸先輩とも、話を交わされている場面を私は一度も目撃したことがなかった。まして、私のような雑魚の泳ぎを観察されておられたなど想像もつかないことであった。

これらの件は、だいぶあとになってから大黒さんが軽く話してくださった。

「あの時、大勢でよってたかっていじくったら、せっかくの平田がだめになる、とパチヤ（早川さんのこと）に叱られたんだわや」と。それを知った時、私は体がゾクゾクするような感動をおぼえたのであった。

15 ボーフラと一緒に泳ぐ

プールには、今のような浄化装置はなかった。一度水道水を満たせば一ヵ月位は入れ替えなしである。予算がないからだ。

練習が終わると、毎日殺菌剤のサラシ粉を撒く。まずバケツに水を入れて、そこへ壜からサラシ粉を出して混ぜる。手をつっこんでこすらないと溶けない。これをやると手の皮膚が塩素に冒されて変色しツヤがなくなる。

サラシ粉撒きは下級生の仕事だ。これを怠るとプールの水は一夜で緑色に濁ってしまう。アオミドロが繁殖するのだ。しかしサラシ粉だって充分の量がないのだから、水は次第に疲れて来る。ミジンコという小さな虫が増殖しはじめる。泳いでいて、水と一緒にこの虫も飲んでしまうけどかまっていられないのだ。

やがて汚れが極限に達すると、水は黄色味を帯びながらも急に透明になる。汚濁物の粒子が大きくなって沈澱しはじめるのだ。臭気も強くなる。赤いボーフラも活発に動いているのが観察されるようになる。「プールの底に足を着くなや！」この時期になると上級生がしきりにどなりはじめる。足でさぐると底は沈澱物でヌルヌルだ。立って歩いたりしようものなら、たちまちそれが舞い上り水は濁ってしまう。水温も30度を超え、泳いでいても汗が流れているのがわかるのだ。

だれかの眼が細菌にやられて赫くなると、たちまち皆に感染してしまう。流行眼（はやりめ、流行性結膜炎）のようになって、眼がしょぼしょぼし、泳いでいて痛いのだ。

眼をつぶって泳ぐわけにはいかない。眼を開いていないと力が入らないのだ、水泳というものは。もうここらが限度というものであろう。

学校には新しい水を替える金がないので、私たちはこのプールを「放棄」し、二葉小学校のプールを借りて、歩いて通いつづけたことがあった。が、その小学校のプールも底はヌルヌルだった。

画人笠原軏とその父漁村(七)

60回　小林智明

軏が新潟中学校一年生となった明治三十一年は、最初の政党内閣である第一次大隈重信内閣が成立した年である。岡倉天心らが日本美術院を創立し、西郷さんの銅像が上野公園に建ったのもこの年である。

当時日本は、日清戦争で老大国の清国を破って世界を驚かしたが、三国干渉の結果、遂に遼東半島還付の羽目となり、以後次第に露国の干渉が著しくなるに及んで国民の憤激はその極に達し、横露膺懲の決意を固めて臥薪嘗胆、ひたすら国力、軍力の増強に専念していた時代である。

新潟県では、前年に勝間田稔知事が宮城より転任して来て、連年の洪水の修治経営に手腕を発揮していた。中学校では、入学時の中村恭平（三河人）校長に代って、湯原元一（長門人）校長が八月、宮崎中学校から転任して来た。しかし在任わずか十ヶ月足らずで県の視学官に転じ、代って教頭の森岩太郎が五代目の校長となった。

二年生の明治三十二年には、旧幕の偉人勝海舟が亡くなり、多くの人々が、西郷隆盛と共に愛されたこの英名高い人物の死を惜んだ。軏の父の漁村も、「哭勝海舟翁」という詩を二首詠んで哀悼の念を捧げている。

この年の秋、新潟中学校では悼ましい大事故が発生した。十一月四日、その日彌彦内野方面に発火演習が行われた帰途、生徒を満載した船が信濃川を下って来て、日没後に船着場に近い万代橋を過ぎようとした時、船腹が橋脚に突きあたって二十数名が川の中へ転落した。汽船の警笛は高く鳴らされ、市中の警鐘が乱打されて多勢の人々が走り、救助に全力を尽した結果、その夜遅くまでにほとんどが水中から救い上げられたが、四年生の和泉平吉（五泉）他二名だけは遂に行方不明となった。学校では数日間全校休校して漁師らの援助を借り、総力をあげて捜索したが遂にわからず、やむなく捜索は中止されたが、翌春になって遺体が発見されるという悼ましい事故であった。

明治三十三年、軏は三年生となり、兄の轍は卒業して金沢の第四高等学校へ進学した。四月七日はその卒業証書授与式であった。午後二時、ラッパが高らかに吹き鳴らされ、先ず森校長の開式の辞、つづいて来賓千頭清臣知事代理井原昂書記官の訓示の詞があった。第七回卒業生四十二名を代表して保倉熊三郎（旭町通、大蔵省銀行局長）が答辞を読んだ。四十二名の中には、兄の轍をはじめ、野上俊夫、会津八一、山内保次、田崎仁義、石井大介（西堀通、石井電光社）、桂逸策（新発田、後に佐藤水原町長）、長谷川轍（村上、新潟銀行支配人）、時田清吉（乙、日本郵船）、伊藤成治（沢海）、館正三（巻）、真島中太郎（濁川）らがいた。在校生を代表して鷲尾信一（黒鳥）が祝辞を読んだ。

五月になると、父の漁村が漢文教師として赴任して来た。生徒達の間では、軏の父君なのでたちまちジンツアマの綽名が奉られた。背が高く、立派な髯をたくわえ、眼光鋭く、声は雷のように大きかったが、善良な人柄が生徒に敬愛された。秀でた額と頭は、悪太郎連に〝紙屑ボテ〟などとはやされた。

赴任早々の漁村先生の様子が、遊方会雑誌第七号（明治三十三年七月発行）に見える。それは「第八回談話会記事」という当時の校内弁論大会の記事の中に〝今日は五月廿六日（土曜）なり、予定の如く午後一時直に雨中体操場内にて第八回談話会を開く。〟とあり、青木得三、佐藤与一、中村隆治など四年生、五年生が七・八名次々と演説をし、十分休息の後、次は名誉会員の演説となり〝三時五分喇叭一声響くと共に再び開会す。第一に発壇せられたるは新任教員渡辺先生にして、雲井に響く大音声にて「紙の説」を述べらる。先づ始めに紙の歴史を語り、次に紙の如く幸不幸の差の甚しきはあらずと案を下し、面白く其の実例を引きて之れを證し、更に歩を進めて曰はく「人の幸不幸の甚しきは何ぞ紙に及ぶ所あらんや」と演説の甚だ面白きがため笑声各偶に絶えざりしが、この一句を耳にするに及び笑声忽ち消せり。次に或は人間の階級を示し、或は幸不幸の差の大小を紙に比し、一句に一歩を進め、遂に人間の最も不幸なるもの（墜落書生）は最も不幸なる紙に劣ること遠きを断言し、吾人を戒めて壇を降らる〟と、新任早々張り切っている漁村先生の姿を留めている。

新潟中学校雑詠十律という詩を、遊方会雑誌第八号と九号に漁村が連載したことは前に記した。

四年生の明治三十四年になると、森校長が女高師範学校に栄転。六代校長、多田綱宏が岩手県から転任して来た。またこの年には、漢文、国語の教師として（後に英語も教えた）新中先輩の小黒直一（号太白）が赴任して来た。「嘗て我校に遊ばれて後、東京専門学校にて攻学刻苦致されし小黒直一氏今般御来任なられたり。先生は漢文国語を授業なさるるにて教壇咳一咳の際、古風の感に堪へ給はざらむ。」と遊方会雑誌第九号に紹介されている。

小黒太白は明治十二年三月、古町五番町の小黒猶蔵の長男として生れた。軏より六才年長で、明治二十六年四月、新潟中学校二年級に入学、二十九年秋、五年修了を待たずに東京専門学校（後に早稲田大学）へ進学した人で、軏とは深い縁で結ばれた人であった。「英語教師の小黒太白氏は母校の先輩であり、書記の山田能男（遊方会雑誌の編集兼発行人でもあった）氏と共に、私に古町の花柳情緒を知らしめた忘れ難い故人である。」と後年、軏が述懐しているように、先輩として、教師として、また親友として、渡辺家にもしばしば出入し、軏の青春時代から、太白が六十七才で亡くなる昭和十九年まで、二人の交友は長く続いた。

昭和十六年四月、第二次大戦の直前、軏は新潟の萬代百貨店（現大和）に於て絵の展覧会を開催した。連日盛況で、多くの名流雅士、同窓が来観した。その時の記念の画帖に寄せられた太白の文から、その交友の大略を知ることができる。それには

軏　原　笠　　古　懐　校　母

故渡辺漁村翁は勝間田蝶夢知事の推挙に由りて新潟中学校の嘱託となる。風格高朗、自ら別格の観。あり。漁村翁の二子、長を轍と云ひ、次を軏と云ふ。予、翁の知遇を辱し、屢、翁の門に出入する中に、轍軏両君と相親むやうになった。轍君は東大史学科を出で、萩野由之先生の修史の業に、助手として多年勤勉の効を挙げ、軏君は美術学校に洋画を学び、成績優秀であった。昭和十六年四月軏君第何回目かの画会を新潟百貨店萬代に開いた第一日目に轍君急逝の知らせあり。倉遑として東京に去り、画会は徹頭徹尾本田無風君の斡旋に依りて首尾よく終了した。予、老来多病、諸君に追随する能はず。宴会唯員に備はるのみ。然るに軏君と無風君と相議して、常に予を顧みること尋常に非ず。緋袍恋々故旧の情と云ふ文句を憶ひ出して沈吟感謝して居る。今此画帖にも一語を寄すべきことを慫慂せられ、全く思ひがけない光栄を喜ぶ次第である。

大東亜戦争第二年目の春　六十六歳　小黒太白

と記されている。

（次号につづく）

記念の集い

―母校卒業五十年―

41回　本間敏雄

昭和五十九年十一月廿四日新潟市東堀九番町の「かき正」別館に青山41回生の卒業五十年の記念すべき集いが開かれた。「かき正」の先代橋本春霞は正岡子規の〝ほととぎす〟派の正統を伝えた最高の門弟である高浜虚子の門人で当時市内の著名な俳人たちはよくこの料亭に集った縁りのところである。幹事長丹羽正樹君（俳号玄子）もその一人であった。その世話で縁りの広間でこの記念すべき会が開かれた。家人の好意でこの日広間に虚子の句〝桐一葉は当りながら落ちにけり〟の軸が掛けられ風雅のある雰囲気を醸し出してくれた。当日は我々41回生が卒業して五十年ということで宴会に先立って物故者の慰霊の行事を行うことにした。板井の福浄寺住職藤由理英君が同期であることとて法要を頼んだところわざわざ車で本尊様を奉持し、法衣をまとってしつらえられた祭壇の本尊様の前に読経。終って法話をしてくれた。参列の期友は物故の友の面影を偲びつつ礼拝し、さまざまの思に耽った。当日は市内、県内の各地からいうまでもなく、東京、浦和、川越、柏、東村山、秋田など県外各地から参会され、卒業以来初めてという友もあり、往時を懐しむとともに現在の生活を語り感極って手を握りあう情景も見られた。盃を重ねるにつれて古稀に近い一同ではあるが元気溌剌、心ゆくばかり談じ、歌もとび出し青春の宴を再現した。思えばわれわれの卒業は昭和九年三月三日であった。その時の卒業生は二〇三名であったが、当日物故者としてその霊前に額いた数は六〇名を越えていた。

その中には病没の友もあったが大東亜戦争に祖国日本のために散った友が多いのである。それらの友の話も出てまことに感慨深い一刻もあった。

久々の友との語らいで名残り惜しい一夜であったが、新潟中学校校歌「玲瓏の天」を斉唱し、一同の健康を祈って万才を三唱して会を締めくくり再会を期しつつこの記念すべき会を終った。

今回は卒業して五十年ということで記念誌発行の計画をしておったのであるが、それも昭和六十年六月一日に「五十年の回顧」という題名で出版することができた。題字は喜寿を迎えられた恩師武田慎三郎先生（青山35回卒）に書いていただいた。先生は快諾され、それに加えて花を画いた色紙を寄せて下され錦上更に花を添えていただいた。その内容は「嗚呼、五十年」という武田先生の文に始まり、幹事長丹羽正樹君の「まれびとの席」という序文をのせた。ついで「思い出」「私の歩んだ道」「いくさの庭に」「雅趣」「論文」と項目にわけて文をのせ、更に「通信抄」として全部の寄せられた短信をのせた。

そして現在消息の判明されている全員に送付した。

われわれはこの卒業して五十年を節目として更にこの高齢社会化した日本のため大いに頑張ろうと思う。

青陵健児よ永遠に幸あれ!!

（六〇・六・二〇記）

玲瓏会（58回卒）

58回　加藤高弘

58回卒は、校歌から拝借して「玲瓏会」と名乗って、卒業回数に因み、毎年5月18日に同期会を行っています。

渡辺秀英先生には毎回ご出席を戴いて居り、講義を聞いてから開宴する事になっています。先生は、今年も中国へ旅行されるについて、団員がやや足りないので、一緒に行く希望者は居ないかとのお話をなされました。

他の期からも同窓が参加するそうで、上海で青山同窓会を開くとの事です。

今年の出席者は23人とやや少なかったが、恒例の近況報告を一人づつやってもらい、大いに歓談しました。

会場が東堀前九の「なかや」と云う場所柄、芸者二人を色どりを添える意味で呼びました。

五月中旬の一番よい季節で、庭の戸を全部開け放ち、清風を入れ午ら二時間の宴は校歌の斉唱で、いつもの通り終了しました。

特別変った事もなく、至極無事平穏でありました。

そろそろ停年だとか、ポストが無いので、取引先へ出向しているとかが、近況報告の中で、変っていたと云えるくらいです。

「幹事、ご苦労さんです」と、労って下さるが、20年もやっていると大して苦労しているとも思いません。

青柳と二人で何んとなく幹事を努め、交替で片方づつが主体となってやるようにしています。

今年は青柳はお嬢さんの結婚式で欠席しました。

同級会は毎年、同じ事を同じようにやって行ってよいと思っています。集る人間が同じでも、話す内容は毎年違っていきます。

大勢集ってもらうに越した事はありませんが、集りたい人だけ集ってもらえばそれでよいと思います。

ただ、毎年欠かさず続ける事が大切で、そこへ行けば、必ず仲間の誰かに逢えると云った気持の寄り所になっていればよい、と思うのです。

私達は、学制の改革で、あの校舎に六年間居ました。昔の五年間、今の三年間と比べ最も長い期間入っていたわけで、それだけ同期間の絆が強いように思います。

又、各先生方ともそれだけ長いお付合いを戴いたわけですが、先生方の中には今回は体調が悪いと欠席された方も居られました。

速やかなご快復をお祈りします。

同期の諸君には、今後共5月18日は、「玲瓏会」の日としてご都合をつけて置いて戴き、出て来て下さるよう、お願いします。（58回加藤高弘記）

昭和60年度 異動一覧

転出

教諭	大湊忠男	〈転出先〉柏崎教頭
〃	田村誠一	新潟中央高
〃	田村真佐夫	文化行政課
〃	田村栄光	新潟北高
〃	川上良夫	江南高
〃	伊藤敏	本校全日制
〃	矢田尚武	新潟南高
〃	平林和郎	巻高
事務長	阿部秋由	青陵短大
主任	大石節雄	保健体育課
主事	佐藤茂子	下越教育事
用務員	深沢弘	黒埼高
非常勤講師	原口和子	辞職
〃	樋山利浩	新潟盲学校

転入

教諭	樺沢奥雄	〈転入先〉新潟向陽高
〃	伊藤義文	新潟江南高
〃	伊藤敏	本校通信
〃	小林巳奚彦	三条高
〃	椎谷勁	新潟江南高
〃	関雅之	新潟中央高
〃	田村貢	新潟南高
〃	小栗強司	新津高
事務長	田沢学	新潟農地事務所次長
主任	笠原政秀	新潟南高
用務員	白井勝利	黒埼高
非常勤講師	内川礼子	新潟北高
〃	池田則美	新発田高

筆跡鑑定から青天白日に！

23回　清水浩一

随分古い話題で恐縮ですが大正七年頃、新潟中学で、やたらと生徒の制服である外とうが頻々と盗まれるといった事件が起ったのである。ところが、その犯人らしい人物が隣の関屋校の若い男がどうもあやしい。「弟2人を中学に妹を女子工芸に通わせ、悠々と生活している。学資に当てているらしい……」とにらんだ刑事がひそかに手を打っている……。時の西警察署長が仲の良い小黒先生に漏らしたのである。さあ小黒先生と私の父は子供の頃からの無二の親友の間柄なのだ。これは大変だ、清水が有力な犯人に疑せられているとは、……。

早速連絡されたのである。

突然、下宿にあらわれた父の言葉、「寝耳に水」の驚きである。

学校では、教頭の君修一郎先生（故人で県知事の父君）が秘かに私を呼んで、筆跡鑑定させられたのである。

「清水君この紙に……」

一金拾八円也、但し大正七年四月分給与也……とでした。

これが筆跡証據とは露知らずでしたが、四とか浩の口とか私は「ル」と書く習慣で決して凡「丿」とは書きませんのでこれが物証となり、真犯人があがって青天白日の身になりました。とんだ笑い話でした。

この事から、「真実、実証を尊重する大切さ」と、「無二の親友の如何に大事なものであるか」と痛感させられました。私も八十九翁となりましたが、青山同窓会々員の鉄の団結を祈っております。

昔の授業の思い出

28回　村田汎愛

内村鑑三全集を読んでいたら次の文に出会った。「英語のLoveは日本語の愛なりと知りて未だLoveの意義をつくしたいと言うを得ず。そのラブと愛とはそれを作りし根底の意義を異にすればなり。Loveは『棄つる』を意味す。……自己を棄て他に任かすの意ならざるべからず。これを邦語の『めず』に対照すれば、その自から異意義の語なるを知るを得べし。」云々とある。

この個所が私に中学時代の修身の授業を思い起させた。当時は修身の教科書（沢柳政太郎博士編）があって校長の担当で週一回の授業だった。三年生頃か小平校長から「愛はすべての徳行の基本であるし国家に対する愛は忠、父母に対する愛は孝し」といった主旨だった。そして期末試験に「愛はすべての徳行の基本なるを例証せよ」という問題が出た。小平校長は口癖のように、上級学校入試に作文とあるのは結局修身科の試験である。それ故作文の試験準備として修身の教科書を熟読せよと強調された。小平先生去って三根校長。

先生は哲学科御出身のせいか、「内包」とか「外延」などと板書されて論理学の講義のような授業を覚えているが、教科書について教育勅語を個別に読ませ。その文章の意味を述べさせられた。私は「コレヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、コレヲ中外ニ施シテ悖ラズ」の個所があって読んで説明させられた。三根先生去って、県の学務部長伊藤氏が校長事務取扱になられたが、実務は教頭の安川数太郎先生が当られた。

新年奉賀式の式辞を述べられた時「新年は芽出度いと言うが、何故に芽出度いのか」と始められた時、私の周辺に失笑が涌いた。いかにも数学の先生らしい発言と思ったせいである。

英語の浜島操先生はアメリカで学ばれB・Aの称号をもっておられた。鼻下にヒゲを蓄え大きな目をクリクリさせる方だった。先生の日本語はどちらかと言うと訥々としていて、それが却って英語はペラペラであるの反証とさえなっていた。「けれども」というのを「けども」と言う癖があった。板書の英字は美事で私はひそかに真似たせいで、今でも私のハンドライティングに先生の影響が残っている。B・Aの称号をもっておられたが、先生のスピーキングは一度も聞いた事がなかった。五年の頃外人をつれて来て、雨天体操場で五年生だけ外人の英語をきかせて下さった。「樽の中の哲人」ディオゲネスの逸話だったが、先生は通訳はせずに、私共の方へ笑顔を向けて反応をみておられた。翌日の授業の時、ディオゲネスは英語ではダイオジニーズと発音すると言われて大意を教えて下さった。在学中外人に接した唯一回のチャンスであった。先生は五年生の私共には英作文法を教えて下さったが、仮定法やら準動詞などは毎時間繰返し繰返し質問されるので仕舞いには「また始まった」と習う方も教える方も笑い出す仕末であった。

「現在の事実の反対の仮想は仮定法過去。過去の事実の反対の仮想は仮定法過法完了」は今でも私は覚えている。先生は私共が大正十年に卒業してから後で新設の福島高等商業学校の教授に栄転された。

思い出に残る恩師のご授業の寸描です。

●編集後記●

今号は、会員の寄稿が多く集まりました。その分、クラス会便り等の写真入りの記事が減りました。ご報告が少なかったのです。読者にとっては、どちらがよいのでしょうか？ご感想をお寄せ下さい。

昭和59年度　青山同窓会費納入者追加分

（1月より3月までに納入のもの）

（郵便振替口座　新潟5-4455青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　0275210青山同窓会）

会費納入のお願い
年会費1口　1,000円
できるだけ1人2口以上でお願いします。
納入先　新年会・総会の会場
又は母校同窓会事務局へ

期	氏名
29	石崎　亟郎
31	佐藤　静午
32	曽我　英彦
33	山北　添三郎
34	北村　秀以
36	富所太三郎
	西藤　司郎
	入寺山　芳雄
	寺井　元一
37	田中　郁郎
	田中　一男
38	河上　由平
	吉田　昭正
	白井　得一
	石黒　秀英
	加藤　秀二
	皆川　良
39	佐藤　裕雄
40	井上　三郎
	平田　甚
	高田　信川
	片桐　靖門
	渋川　七夫
41	菊池　晌三郎
	倉島　恒雄
	高橋　正蔵
	小黒　保栄
42	長谷川　友也
	飯田　利男
44	鈴木　繁男
	水野　清助
	金子　一夫
45	石橋　映
	高山　照三
45	河辺　邦昌
	小林　直弥
	小島　平弥
46	湊　栄一
47	中川　和保
	木村　俣郎
	古田　辰郎
48	天塚　孝平
49	飯田　正雄
	堀内　憲政
	梶山　藤清
	佐藤　主博
	池井　浩淳
	町田　寛
50	鶴田　洋一
	根本　原勉
51	勝山　新爾
	菅野　浩
	波田野　勇松
	小野　芳一
	村上　安仁
	塩谷　善志知
	河路　渡
52	高沢　常夫
	斉藤　稔治
	田中　昭治
53	玉木　将二郎
	坂井　武夫
	藤沢　辰雄
55	片岡　啓一郎
	山際　淳夫
56	鈴木　寧
	久保田　剛敏
56	伊藤　泰夫
	浦野　説衛
58	種村　祥一
	沢　隆司
	大関　博良
	三条　昭二
59	飯村　康一
	谷　登之
	能登　省三
	小柳　佳一郎
60	坂井　丈夫
	矢川　和偉
	小林　賢一
61	横村　一郎
	本間　淑人
	藤田　靖
62	松田　昭夫
62	渡辺　哲也
	山根　務
	遠藤　亮
	松本　邦男
	平田　邦夫
	杉内　愛
	五十嵐　昭雄
	斉藤　文志郎
	岩渕　真
	貝津　徳男
	長谷川　愼
	久保　敦子
	宮本　輝夫
	岩田　亮也
	重野　直也
	中野　義一
	漆谷　介二
62	中村　京子
	本多　忠彦
63	池治　男
	平野　恒夫
	土田　浩平
	庭山　昌明
	桑山　浩然
64	小林　脩
	広川　祐之
65	入山　八郎
66	西原　靖臣
	金子　兼三
	樋口　博行
	神田　征輝
	福田　幸子
	杉山　道男
67	山口　文夫
67	前田　邦光
	斉藤　真憲
	井上　一郎
68	宮尾　益征
	進藤　喜代子
	渡辺　泰彦
70	清水　伴雄
72	小林　正昭
74	上田　隆
76	吉岡　俊
80	西山　克尚
81	中野　ますみ
81	篠田　伸夫

通信制
113名